

## 【神奈川】眼科が訪問リハ開始、2023年にはデイサービス事業も-菊地琢也・菊地眼科クリニック院長に聞く◆Vol.3

2022年11月18日（金）配信 m3.com地域版

2014年の開業時から在宅医療を行う「菊地眼科クリニック」（川崎市幸区）は2021年、理学療法士による訪問リハビリを始めた。2023年春までには視覚障害者を対象にしたデイサービス事業も始めるという。在宅医療に訪問リハ、さらにデイサービス。眼科では珍しいこんな取り組みをなぜ行うのか？「それは、在宅現場での気付きです」。菊地琢也院長は着想の経緯を語った。（2022年9月26日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



菊地琢也氏（クリニック提供）

——菊地眼科クリニックは2021年6月、訪問リハビリテーション部門を開設しました。在宅医療に続き、これも眼科では珍しい取り組みだと思えます。

男性の理学療法士（PT）を常勤雇用したことに合わせ、訪問リハビリテーション部門を立ち上げました。このPTとの出会いは個人的な縁で、2年ほど前に私が転倒でケガをしたことが発端です。ケガの程度が割と重く、友人づてに知り合ったPTに運動療法を頼みました。彼は病院に在籍しており、在宅リハビリを行っていました。話を聞くと、「もっと個人で在宅関係者にアプローチし、仕事を増やしたい」とのこと。

私はピンと来ました。現在、整形外科でも在宅医療を行う医師は増えていると思いますが、それでも内科の在宅医が診ているケースが大半でしょう。「必要性があるのにリハビリ介入されていない在宅患者さんがいるのではないか」。私が担当する患者さんを見ても思っていたことです。

「そもそも、体が不自由なのだから在宅医療が必要になるのではないか」と思われるかもしれませんが、「在宅患者」と一口に言っても状態はさまざまです。身体的にリハビリ介入することで少し歩けるようになるのではと思われる人はいますし、中にはある程度動けるのに動く気力が落ちていたりみられる人もいます。眼科領域で言えば、糖尿病網膜症の患者さんで脚を切断して義足を着けている人はリハビリの必要があります。「こういった人たちの受け皿を自分でつくれるかもしれない。リハビリ介入で在宅患者さんのADLが上がれば、在宅医療の質にも良い影響を与えるのではないか」。そう考えました。

——「在宅患者と言っても状態はさまざま」というのは現場を知らないと分からないことだと思えました。訪問リハの現在の利用状況は。

月に10人ほどの在宅患者さんに身体的なリハビリを行っています。今のところ全てケアマネジャーからの依頼であり、「この人にリハビリを行って欲しくないか」という特化型の相談があるほか、眼科在宅医療の依頼に加えて相談されることもあります。

訪問リハ部門に絞ればまだ収支はとんとんですが、開設して良かったと思います。在宅関係者の相談に応えられる幅が広がったうえ、訪問リハビリをきっかけに当院の在宅医療を知ってもらえることもあるので、「在宅」「リハ」の存在が相互に良い影響を与えています。

——先生は施設への訪問診療のため女性医師を非常勤で雇用しています。理学療法士を含め、医療人材をどう活用していくかは開業医として意識されていますか。

そうですね。中でも女性医師の働き方には注目しています。職種を問わず「働き方改革」が言われる今、医療界では女性医師に可能性があり、特に子育て中の女性医師と在宅医療は相性が良いと思います。

私の周りには「子育てがあるからフルタイムは難しいけど、働きたい」と考えている女性医師が複数いますが、在宅医療はそんな人たちでも働きやすい午前10時から午後4時までに行うことが多く、訪問日の融通がききやすい特徴もあります。

例えば外来を予約制にしている当院の場合、担当医の私にトラブルがあって休まないといけないときは患者さん一人一人にすぐ連絡しないといけません。眼科の在宅医療では診療の緊急性が低いことが多く、スケジュールの変更が外来に比べて難しく印象です。これは、子どもの発熱など有事が起こりやすい子育て中の医師にはポジティブな要素でしょう。特に眼科は女性医師が多い診療科なので、「眼科在宅での非常勤」はニーズがあると思います。



同院の機器で視野検査を受ける施設入居者（クリニック提供）

——2014年開業時からの在宅医療、2021年の訪問リハ部門開設に続き、新たな展開の構想もあるとか。

2023年春までを目標に、視覚障害者を対象にしたデイサービス事業所を開設したいと考えています。これも、在宅医療の現場を見て浮かんだアイデアです。

眼科の在宅医療を利用される患者さんの中には家族の介助が必要になる人がおり、患者さんの視力によっては家族がつきっきりになっていることもあります。すると、患者さんだけでなく家族もなかなか外に出られない。デイサービス事業所はたくさんありますが視覚障害者を受け入れているところはとても少ないので、私が作れば患者さんご家族にとって生活や喜びの幅が広がるのではないかと。

施設のイメージは柔道などの稽古に使われる道場です。一般的なデイサービス事業所よりも広いところを借り、転倒などによるケガのリスクを減らすためにマットを敷き詰めて安全性を高め、利用者が動きやすいようなるべく障害物を取り除いた空間にしようと考えています。その一方で、ランニングマシンや筋力トレーニングの器具を置けば、利用者によっては体を動かす喜びを感じられるかもしれません。環境と人的体制でいかに安全性を高めるかが問われますが、在宅患者さんやご家族の姿を見て必要性を感じたからこそ、チャレンジしたいです。

——最後に、眼科で在宅医療を進めていくうえでの課題や展望をお聞かせください。

課題は経済的メリットです。私は患者さんへの貢献度やクリニックとしての付加価値を重視して在宅医療を継続していますが、現状、経済的な部分についてはいかなるものかと感じています。

診療報酬点数がそこまで低いとは思っていませんが、眼科が在宅介入する場合、多くは既に内科の先生が関わっており、眼科が請求できる項目は検査料くらいしかありません。訪問するといっても検査料はあまり高く設定されていないため、事前準備や移動にかかる労力を考えると、もう少し経済的なメリットがあればありがたいですね。これは、眼科以外のマイナー科の医師も感じていることかもしれません。

今後の展望としては、皮膚科や耳鼻科などの先生と連携していきたいです。内科の先生とは既に協力しながら在宅医療を行っていますが、ほかの診療科についてはニーズがあるものの行っている先生が少なく、個人的にもまだ関係を築けていません。特に施設からの要望が多いのが耳鼻科領域です。「耳垢がたまっていて取ってあげたい」など処置に関する希望があるのに在宅医療を行っている耳鼻科医を知らず、「いい人はいないか」と相談されることがあります。

在宅医療は高齢化の進展によって需要は増えており、この傾向は続くと思われま。先述のようにニーズの細分化も起きてくると思うので、興味のある先生は診療科を問わずチャレンジしていただけたらうれしいです。開業医として自分の色を出しやすい利点もあると思います。

#### ◆菊地 琢也（きくち・たくや）氏

2000年東海大学医学部卒。2004年昭和大学大学院修了。昭和大学病院や総合高津中央病院などを経て、2014年に「菊地眼科クリニック」を開院。開業時から在宅医療を行っており、2021年には理学療法士による訪問リハビリテーションも始めた。日本眼科学会眼科専門医、昭和大学眼科兼任講師など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

#### → 神奈川県に関する他のニュースを見る

[茨城県](#)

[栃木県](#)

[群馬県](#)

[埼玉県](#)

[千葉県](#)

[東京都](#)

[神奈川県](#)

#### 神奈川県に関連するニュース

[新型コロナ:新型コロナ 第8波備え 確保病床1640に増床 県、行動制限は要請せず](#) / 神奈川県  
11月17日

[心臓移植:「やりたいことたくさんある」 心臓移植へ寄付を 川崎・五十嵐好乃さんの両親呼びかけ](#) / 神奈川県  
11月15日

[【神奈川県】「最高のかかりつけ医」になるためにコミュニケーション力を磨く-武井智昭・高座渋谷つばさクリニック院長に聞く](#)  
11月11日

[【神奈川県】「ポイントは小型機器とIT」検査が重要な眼科で在宅医療を行う方法-菊地琢也・菊地眼科クリニック院長に聞く◆Vol.2](#)  
11月11日

[横浜のクリニック看護事務の女性2人 復職手続きの打ち切り「不当」と提訴 地位確認と慰謝料求め](#)  
11月10日

記事検索

ニュース・医療維新を検索

